ザレッドクロス みずうみ

日本赤十字社島根県支部　みずうみ赤十字奉仕団

「地雷廃絶」「被害者ゼロ」を目指して

リズムネットワーク
代表　上井滋子

みずうみ赤十字奉仕団の皆さまには、平成二十年度から世界条約「対人地雷全面禁止条約（通称オタワ条約）」加盟を呼びかける「ちょうちょキャンペーン」へのご協力を頂いて参りました。

毎年大量のちょうちょカードの入った包みを開けるたび、お心の深さに感謝の気持ちでいっぱいになります。また、永年続けておられる地雷被害者への募金活動も、地道で忍耐強いお心が無ければ続かないことと、ご尊敬申し上げて已みません。

ちょうちょキャンペーンは、か弱い蝶のひと羽ばたきが、遠い天地に大きな影響を及ぼす、とのカオス理論と、オタワ条約の「一人からの出発」を拠として考案され、今年で十二年を迎えました。

当初、一人が一人に地雷廃絶を訴える地道な作業など、このＩＴ時代においてローテクでアナログ的で実りのない物のように軽んじられましたが、協力者の数は年々増え続け、昨年は集票五万三千枚を数えて、勢いは今なお増しています。

およそ市民の力ほど強い物は無く、弛みなき草の根の力は、決して一時的現象に留まらず、確実に嵩を増していくものではないでしょうか。

オタワ条約は、一人の市民の一通のファックスから出発し、遂には世界中の市民が手を繋ぎあって、世界を動かすうねりとなり成立しました。中心となったＮＧＯ団体ＩＣＢＬ（地雷禁止世界キャンペーン）は、その功績によりノーベル平和賞を受賞。地球上の地雷はオタワ条約によって画期的な減少を見たのでした。

翻って、本年一月に訪れたカンボジア・バッタンバン州の地雷原では、前日の除去中、二人の死傷者が出たとのこと。カンボジアには未だ六〇〇万個の地雷が埋まっていると言われます。

「地雷廃絶」「犠牲者ゼロ」への道は、遥か彼方に思われますが、いえいえ、女性は決して挫けないはず。

今日よりはまた、皆さまとともに、更に強く固く手をつなぎあい、念願貫き通して参りますこと、茲にお誓い申し上げる次第でございます。

●オタワ条約の成果（JCBL）●

現在	国連加盟国	193ヵ国
	オタワ条約締約国	162ヵ国
	非締約国	35ヵ国

・ここ数年の締約国

南スーダン	（2011年 7月）
ツバル	（2011年 9月）
フィンランド	（2012年 1月）
ポーランド	（2012年12月）
オマーン	（2014年 8月）

・最新の地雷モニター報告2016年度版は対人地雷犠牲者数が最少だった2013年に対し、2015年は6,461人、95%の増加となった。これはリビア、シリア、ウクライナ、イエメンでの武力紛争が原因である。被害者の殆ど（78%）が市民であり、その38%が子供だと報告している。

（2016.11.22現在）

平成二十九年度総会

四月十三日（木）日本赤十字社島根県支部会議室に於いて、県支部から四名と団員十七名の出席で平成二十九年度の総会が行われた。

赤十字奉仕団信条唱和と団歌斉唱の後、大塚委員長、布野事務局長の挨拶があった。続いて松本淑子さんへ「特別会員章」の表彰伝達が行われた。

議事に入り、平成二十八年度事業報告、決算報告、監査報告が行われ承認された。続いて二十九年度事業計画、予算共に承認された。今年度の団員はとうとう六十名でのスタートとなった。

午後は、在職中、私達団員が長い間お世話になった、日赤島根県支部前事業推進課長天野仁美氏に「みずうみ赤十字奉仕団と私」という演題で講演していただいた。

特別会員章表彰伝達

創立六十年余りの歴史をふり返り、昭和三十一年三月十日、石倉トミ委員長のもと十八名で発足、団費は六〇〇円（初年度は三〇〇円）であった事、日赤島根県支部の庭に、梅三本、バラ十五本を植えられたこと、方針は「手作りにこだわる」「人のやらない事をさがしてやる」ということだったとか。色々なボランティアを実践され、委員長も現在五代目で、活動の形は少しずつかわって来ているけれど、ずっと続いている事もあると話された。

天野仁美さんの講演

平成五年四月からみずうみ赤十字奉仕団と活動を始めて、多くの団員の人との出会いがあり、いろいろと学ぶことが出来たと感謝された。

最後に「今日はとてもうれしい日、また一緒に色んなことがしたい」と結ばれた。

天野さんがいらっしゃらないと、何となく淋しく、特にレッドクロスの編集においては心細い限りであるが、何とかがんばっていきたいと思う。（大和）

委員長あいさつ

奇しくも昨年の総会四月十三日は熊本震災が発生して大変な被害が出ました。本日は鎮魂と祈りに包まれる一日になることでしょう。みずうみ赤十字奉仕団も急遽五月八日に予定していた対人地雷救援を熊本地震災害義援に切り替えて街頭募金活動を実施しました。救援活動が始動した中で熊本青年赤十字奉仕団は東日本大震災後、意識して災害学習、防災訓練を積み重ねていたことが、震災後、直ちに災害支援に役立ち、日頃から備える学習を継続する必要性を痛感いたしました。

また、災害で忘れてならない3・11から六年目を迎えます。風化させてはならないのとの思いで、「東日本大震災義援金募金」活動を年間事業として実施したく思います。

新年度の事業計画案は殆ど継続で提案しています。赤十字乳児院ボランティアは二年が経ち体制は整いましたので今後は更に充実を図りたいと考えます。

団の運営につきましては団員皆様の協力により現在の団費で維持しています。諸先輩が長年心血を注ぎ築き上げられた思いを継続し発展をと願うとき、赤十字活動に賛同下さる仲間を募って共に歩む奉仕の輪が広がれば何と力強いことでしょうか。団則では団員の紹介で成立となります。皆様のお力をおかし下さることをお願いし挨拶とさせていただきます。

天野さんを囲んで

全国赤十字大会に参加して

原田 美智子

五月二十五日（木）、明治神宮会館で平成二十九年度全国赤十字大会が開催されました。名誉総裁皇后陛下、名誉副総裁ご臨席のもと全国の赤十字関係者一九〇〇名、島根県からは十九名が参会しました。みずうみ赤十字奉仕団からの参加は私一人でしたが、大会の合間に県内の他の団体の方々と交流できたことは貴重な体験でした。式典で近衛社長が、今年は日本赤十字社創立一四〇年の節目であるとして、その歴史に言及した挨拶をされましたが、その内容に深い感銘を受けました。

また、実践活動の報告として「平成二十八年熊本地震災害」「イラク紛争犠牲者救護事業」に参加された赤十字病院医師二名の方の活動の様子を聴き厳粛な気持ちになりました。ことに熊本地震災害の状況は、全国どこにでも起こりうることについての説明だけに他人事ではありません。厳しい現場での赤十字の活動に、組織力の偉大さを強く感じました。

島根県の参加者

日本赤十字社一四〇年の歩み

日本赤十字社は一八七七年（明治十年）に佐賀県出身・佐野常民らによって救護団体「博愛社」として設立されました。西南戦争で傷ついた負傷兵を敵味方の区別なく救護するための活動からその歴史が始まったのです。そして、一八八七年（明治二十年）に国際赤十字に加盟し「日本赤十字社」に改称して今日に至っています。

「戦時救護」から始まった日本赤十字社の活動は「災害救護」そして「人道支援」を中心としたさまざまな事業へと転換してきました。「血液供給」も「人の育成」も「ボランティアの活性」も、日赤の展開する事業はすべて苦しんでいる人を救うという理念に根差して誕生し未来に向けて日々研さんを続けています。

（赤十字NEWS　九二四号）

大塚委員長　日赤社長表彰

日本赤十字社創立百四十周年にあたり全国大会において、赤十字ボランティア活動を通じて日本赤十字社の事業推進に尽した顕著な功績がたたえられ表彰されました。

平成二十九年八月一日（火）島根県庁知事室にて伝達式が行われ、日赤島根県支部溝口善兵衛支部長から「日本赤十字社業功労者特別表彰状」が授与されました。

大塚良子委員長は平成十七年度入団、二十年度副委員長、二十四年度委員長に就任、常に奉仕団信条に問い、先達の刻まれた基盤の上に、変動する世相、団相を鑑みつつ、身近から世界へ善意の心で照らす奉仕の集積、充実、発展に、団を牽引して尽力されています。

赤十字救急法講習と古布ふきんづくり

六月二十三日(金)　参加十二名

赤十字救急法指導員本田坦氏を講師にお迎えし、赤十字救急法についての講習会を実施しました。

はじめに、熱中症の症状及び応急処置の手順、方法について指導を受けました。

水分補給が有効な予防対策の一つだということは、広く知られているところです。人間の身体は、一度に多量の水分をとったとしてもうまく吸収されず、汗、尿として放出してしまうこともあるようです。また、コーヒー、紅茶、煎茶等の利尿作用の強い飲み物も適しません。したがって、水や麦茶を適量の塩分と共にこまめに摂取すること、つまり、水分の質や取り方が大切だということは大変参考になりました。

胸骨圧迫

AED を使って

ふきんづくり

続いて、気道に異物が詰った場合の除去の方法について学びました。

先ず咳をさせます。異物が出なければ背中をたたき、次に、背後から両手を回して握りこぶしを作り、上腹部に当て突き上げます。これを交互に繰り返すとよいそうです。

その後、心肺蘇生の手順と方法、AEDの使い方の実習を行いました。

通報して、救急車が到着するまでの時間は通常約八分。その間、心肺蘇生を行うことにより、救える命があるということで、まわりの人との連携の大切さを痛感しました。そのためには、多くの方が今回の様な講習をうけ、知識と技術を身に付ける必要があるのではないでしょうか。

最後に、三角巾包帯法は、三角布のたたみ方、腕の創の包帯の巻き方について実習し、講習を終了しました。

午後は、古布ふきんづくりを行い、有意義な一日でした。

(池田)

心肺蘇生とAED

心停止

声かけをして反応がない、普段通りの呼吸がない。

胸骨圧迫

胸骨の下半分(胸の真ん中)に両手のひらの基部を重ねて置き、毎分100～120回の速さで30回、体重をかけ垂直に約5センチ押し下げる。

人工呼吸

顎先を上げて気道を確保し、鼻をつまんで、1秒かけて口に息を吹き込む。2回行う。

・以後は、胸骨圧迫30回、人工呼吸2回を救急車や医師に引き渡すまで続ける。

AEDとは

心臓突然死の原因は心室細動(心臓の痙攣)が多い。手当は除細動(痙攣を抑えること)を行う。AEDは心電図を判読して、必要なら電気ショックによる除細動を指示する。

AEDの使い方

電源を入れる→電極パットを胸に貼る→AEDが心電図を解析する→AEDの指示で必要なら、除細動ボタンを押して電気ショックを与える。

※以後は、AEDの指示に従う。

「八重桜」
浜田光代・吉岡信子

こんにちは

ファミリーヒストリー

溝口さち子

私はＮＨＫの「ファミリーヒストリー」という番組が好きだ。

ご存じの方も多いと思うのだが、登場したゲストの家族の歴史をさかのぼってたどっていく。白黒写真に写った名もない人々の引き締まった顔つき、その波乱にとんだ実話は、どんな物語より感動的で興味深い。正に生きた歴史そのものだ。

自分自身の「ファミリーヒストリー」については、父母の生前に直接聞く機会がなかったので、ほとんどわからないのだが、姉から聞いた母の子供の頃の話が心に残っている。

主人が知事となり知事公舎に住むようになってから、訪ねてきた姉が「ここら辺、赤山っていうんだね。お母さんが昔言ってたんだけど、子供時代赤山に住んでたことがあって、その頃が一番幸せだったそうだよ。入学したのは北堀小学校だったって」。

初めて聞く話で驚くと同時に胸を突かれる思いがした。

母は明治四十五年生まれ。父親は教師で宿舎が赤山にあったらしい。三人姉妹の長女だったが末の妹の出産時に母親が亡くなった。七才の時である。それからは小さいながらもお母さん役となってしまった母にとって、真に幸せな子供時代はとても短かったはずだ。それだけに輝くような思い出だったのだろう。

赤山の坂を上るたびに、どこら辺に住んでいたんだろうかと辺りを見回してみる。一〇〇年程前にいた縞の着物を着た小さな女の子を思い浮かべながら。

“チーズ通への一歩を踏み出しませんか？”
チーズの基礎知識（種類と旬の季節）

1．硬質チーズ
牛乳製　冬　山岳地方産　このまま食べる又料理に使用
・グリエール・スイス　・エメンタール・スイス
・コンテ（仏）　・パルメザン（伊）

2．半硬質チーズ
牛乳製　夏　マイルド（やわらか）な果実の味
・ゴーダ（蘭）　・チェダー（英）　・シメイ（白）　・カンタル（仏）

3．白カビチーズ（軟質）
牛乳製　春秋　クリーミーな味　乳白色　艶と弾力がある
白い皮は食べても食べなくてもよい
・カマンベール・ド・ノルマンディ（仏）　・ブリ・ド・モ（仏）

4．ウォッシュタイプのチーズ（軟質）
牛乳製　春秋　外側に菌を植え熟成　出るぬめりを地酒で洗いながら作る
独特の強烈な匂い　皮は橙色ものは食べない
・ボン・レヴェック（仏）　・ムンスター（仏）
・リヴァロ（仏）　・マロワル（仏）

5．ブルーチーズ（軟質）
牛・牛と羊・羊乳製　春　強い塩味　青カビの刺激　羊のミルク味
強い香りが特徴
下記は世界三大ブルーチーズ
・ロックフォール（仏）　・ゴルゴンゾーラ（伊）　・スティルトン（英）

6．山羊のチーズ（軟質）
山羊乳製　春～夏　白カビ又は木炭の粉をまぶしたもの
このまま食べても調理しても美味　形状は様々
・クロタン・ド・シャヴィニョール（仏）　・ピコドン（仏）
・サント・モール（仏）

7．フレッシュチーズ（軟質）
非熟成　脂肪分が少ない　香草、胡椒、大蒜入りなど様々
パンやお菓子に使用
・プチスイス　・ブルサン（仏）　・ヴァッシュ・キ・リ（仏）
・モッツァレラ（伊）

＊**3（白カビチーズ）と4（ウォッシュタイプのチーズ）の食べごろ**
・中央部全体が軟らかくなったとき
・**食前**冷蔵庫から出し、その日の気温によるが数十分**室温におく**
＊**臭いが強い**ほど味は**こくがあり美味**　先ずは息を詰めて食し美味を知り慣れる
＊**名品ワインやチーズ**　ラベルに**Ａ．Ｏ．Ｃ．表記**がある　フランスの国家的審査委員会が厳選し原産地明記を認可したもの

新入団員紹介

杉原千歳

総会で、入団ご挨拶中の杉原さんです。豊かなご経験を奉仕に活かして頂けますようお願いいたします。

核兵器禁止条約

「長崎から世界へ」

第二次世界大戦以後70余年、国際赤十字は核兵器の使用禁止と廃絶への運動を使命としてきました。

4月下旬、長崎にて35カ国の代表約80人が参加して、6月中旬から行われる国連の「第二回核兵器禁止条約制定へ向けた交渉会議」を後押しするため、活動計画を協議しました。

◆各政府に条約制定交渉への参加を促す。
◆核兵器の軽減措置を求める。
◆若い世代の核兵器への意識向上を図る。

などを計画に入れ、「核兵器の無い世界の実現は未来世代への義務であり、人類存続への責務である」と宣言しました。

（赤十字ワールドニュースより）

「核兵器禁止条約」採択

ついに国連において、7月7日核兵器の開発・使用・保有を禁止する条約が、賛成122、反対1（オランダ）、棄権1（シンガポール）で初めて採択されました。50カ国が批准すれば90日後に発効になります。

しかし核保有国の米国、ロシア、中国、核の傘下にある日本や韓国の不参加での採択は、実効性に懸念があります。

条約制定は出発点です。私達の地雷撲滅「オタワ条約参加運動」と同様、核保有国へ核の軍縮・廃絶を迫る運動も、長く遠い困難な道程となるでしょう。

核戦争勃発の緊張と脅威に晒されている全世界、全人類の救済に、赤十字理念の下、「重大な岐路に在る今こそ、行動を！」と、声を上げ立ち上がる全赤十字を高く評価し、更なる成果に、切なる期待と希望を繋ぎたいと願います。（太田）

核保有国	米国・中国・英国 ロシア・フランス	イスラエル・インド パキスタン・北朝鮮

たより あれこれ

●対人地雷犠牲者救援街頭募金

5月8日（月）　於　松江駅前
募金額　　40,154円

●赤十字運動月間協力

5月14日（日）　於　イオン

●平成29年7月5日からの大雨災害義援金

九州北部（福岡・大分県）は7月5日から複数回にわたる線状降水帯停滞による豪雨と土砂に見舞われ死傷者、家屋倒壊流出、田畑の冠水・埋没など、甚大な惨禍を被りました。被災者の方々に、心からお見舞を申し上げ、一日も早い復興をお祈りして、8月22日、義援金2万円を日赤島根県支部へ寄託しました。

あとがき

今年の夏は一段と蒸し暑い日が続いた上、七月には島根県や九州地方で大雨特別警報が出されました。幸い島根県内では大きな被害はありませんでしたが、各地で大雨による被害が相次ぎました。テレビや新聞等で被災の様子を見聞きするたびに、日ごろの備えの重要性を感じるところです。

さて、四月からみずうみ赤十字奉仕団の担当となり、約半年が経過しました。共に作業を進めるなかで、以前よりも親密な関係となり、改めてみずうみ赤十字奉仕団の皆さまのあたたかさや優しさ、そして「奉仕の心」を感じております。また、人生の先輩として多くのことを教えていただいております。ありがとうございます。

まだまだ頼りない存在ではありますが、今後も皆さまから色々とご教示いただきながら、活動を支えさせていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

（落合）

ザレッドクロス みずうみ第四十三号
平成二十九年九月三十日発行
発行者　松江市内中原町四十番地
日本赤十字社島根県支部内
✚みずうみ赤十字奉仕団
委員長　大塚　良子
☎(〇八五二)二一－四二三七
編集委員
◎太田　裕子・大和　友子
梶　啓子・原田美智子
池田　裕子・落合　七彩
印刷所
(有)太陽平版
☎(〇八五二)三八－八〇五八